



## 新収蔵資料紹介

～厨子入薬師如来坐像・徳住筆六字名号他～



厨子入薬師如来坐像 堂内安置状況

昨年度、小田切川後集落のお堂から、本尊像をはじめ掛軸等一式が寄贈されました。お堂の老朽化に伴い、集落で文化財を管理し続けることが困難になったためです。本尊薬師如来坐像は、過去に当館の特別展『村人の祈りと集いの場～お堂の役割を探る～』（2000年）で借用し、善光寺門前に住む仏師が関係する仏像であることが分かっていたため、寄贈していただくことになりました。ここでは本尊像を中心に、寄贈された資料についてご紹介します。

## 《厨子入薬師如来坐像》

### 1. 薬師如来坐像について



薬師如来坐像

像高 33.2 cm という小型の坐像。台座を含めた総高 58.7 cm。木造彩色、彫眼。

頭体幹部含めて内割り（像の内側を削ること）を施さない一木で造



厨子

られています。膝前材は別材を矧ぎつけ（接合すること）、さらに裳先材を別製で矧いでいます。膝前部が頭体幹部に比べて非常に高さが低く、長さも短く小さめに造られており、頭体幹部とのバランスが悪いように感じられます。また体幹部の衣の処理は観念的で素朴な彫りですが、膝前部はさらに簡素な彫りとなっていて、おそらく過去の修復の際に膝前

部は新たに造り直されたものと思われます。また表面の彩色がバリバリとめくれ上がった下に、それ以前に塗られた彩色が何層か重なって見え、やはり過去に何度か修理されてきたことを伝えています。

頭髪は螺髪粒が彫り出されず、肉髻珠の表し方も形式的なものですが、それに比べて顔つきは意外に整っていて穏やかな表情が印象的です。全体的に大らかで素朴な作風から、近世初頭頃の地方作であると考えられます。

像容は左掌の上に丸い容器を載せています。あまりにも平たいので薬壺らしく見えませんが、薬師如来の御姿でしょう。ただし両手先は後補（欠失した部分を補うこと）のため、阿弥陀如来など他の如来像であった可能性もありますが、後述するとおり薬師如来坐像版木が共にお堂に伝来したことから、当初から薬師如来像として造られたものと考えて良いでしょう。



薬壺

台座は蓮華の下に反花ではなく荷葉座を組み合わせたもので、像より後の時代、おそらく江戸時代後期頃に造られたものです。台座上面には2箇所穴が開けられており、中程の丸い穴は上に載せる像と連結するためのホゾ穴かと思われますが、現状で像にはホゾやその痕跡はありません。像底を修復した際にホゾがなくなってしまうのでしょうか、それとも像と台座は本来別のものなのでしょうか。前述のとおり像の膝前材が当初より小さくなっていることが想定されますので、膝前材が本来の大きさに戻れば台座とちょうど良いバランスになるかもしれません。ま



台座上面

た、台座上面の背面側に四角い穴が空いているのは光背を挿し込んで立てる穴だと思われませんが、現状の光背の柄は前面が平

な半月形で、台座の挿し込み穴と形が合っていない。また台座の穴の方が光背の柄の先端よりも前後の長さが2倍近く長いため（横幅は合っています）、この台座には柄が四角く、もう少し前後に太くて、もしかすると長さも長い光背がセットになっていたのかもしれない。像の膝前材や像底が修理されたときに像自体が少し低くなり、光背を新しく小さく作り直したとも考えられます。この光背も江戸時代後期頃に造られたと思われる。

さらに、台座の下に敷板のような形で板が敷かれています。ただし、ここでも敷板と荷葉座の大きさが微妙に異なっており、また、敷板の中央に現状では用途不明の四角い穴が空いていることから、台座と敷板も本来のセットではないかもしれません。

以上、薬師如来坐像及び付属品についてみてきました。像、光背、台座、敷板はそれぞれ組み合わせた時の大きさが微妙に異なり、また現状ではサイズ



光背



光背の柄（先端）



敷板裏面

が合わない挿し込み穴や用途不明の穴が見られることから、本来の組み合わせではないも

のが集められてきた可能性は否定できません。しかし像自体何度も修復されており、特に膝前材が大きさも含めて当初の姿とは異なる可能性があることから、現在の台座とは大きさが合わず、また光背も作り直したため台座と合っていないと考えることもできるかもしれません。敷板も度重なる修復のために、現状のセットとは合わなくなったのかもしれない。このように本像にはいくつか不明な点がありますが、敷板に墨書銘があり、近世における善光寺門前仏師についての情報を知ることができます。

## 2. 長谷川派仏師について

敷板の底面に墨書銘があり、「天明五巳 中秋／細色并二後光なす台座是ヲ致／善光寺新田町／住人佛師兼七／三度め」と書かれています。これにより、天明5年(1785)に善光寺新田町の住



敷板墨書銘（赤外線撮影）

人である仏師兼七によって、仏像の補彩（彩色を塗り直すこと）が行われ、併せて光背と台座が新造されたことが分かります。また兼七がこの仏像に関わるのが三度目であるとい

うことも分かります。

兼七とは、善光寺門前に住んでいた長谷川派仏師の初代長谷川兼七のことで、長野市内周辺に、新造の作例や古仏の修復例が複数確認されています<sup>\*1</sup>。各墨書銘から分かる活動期間は、この敷板に書かれる天明5年を皮切りに、文化6年(1809)まで確認されています。兼七の子孫にあたる長谷川澄子氏の報告によると<sup>\*2</sup>、長谷川家の過去帳には兼七について、「文政元寅年(一八一八年)五月三日没 六十四才 宝暦四年(一七五四)生」と書かれているとのこと。この生没年からすると、最初の墨書銘に書かれる天明5年は兼七31才、最後の文化6年は55才となり、それ以前、以後の作例が存在する可能性は十分に考えられ、今後の発見が期待されます。

また長谷川澄子氏の報告によると、兼七は長谷川家の過去帳では二代と書かれています。しかし、過去帳に記載される長谷川家の初代や三代以降の人々の名前は仏像の墨書銘などには現れず、現在作例から確認される長谷川派仏師は、初代兼七、二代政七、三代宦司、四代専司、五代が長谷川ではなく大内と名乗りを変え、五代大内泰助となっています。すなわち、仏師の長谷川派は長谷川家の家系とは別に、兼七を初代として代々長谷川の名乗りを受け継ぎ、五代まで存続したものと思われれます。五代大内泰助に関する墨書銘は後述するように明治37年(1904)と書かれます。以上から、長谷川派仏師の活動は、少なくとも天明5年から明治37年まで、5代119年

続いたこととなります。長谷川派の作例としては現在約30体が確認されていますが、調査次第で今後増える可能性は十分あります。

長谷川派がどこに居を構えたのかについて各作例の墨書銘から見ると、この敷板では「善光寺新田町」と書かれ、また他の作例では「善光寺問御所之住人」(寛政10年・1798)とも書かれます<sup>\*3</sup>。二代政七の作例では「善光寺石堂町」(文政10年・1827)、三代宦司では「善光寺新田町」(天保9年・1838)や「同石堂町」(安政3年・1856)、四代専司では「長野石堂町」(明治11年・1878)、五代大内泰助では「長野市桜枝町」(明治37年・1904)などと書かれます。

兼七から四代専司までで書かれる地名が異なっているのは、現在の区域でも「問御所・新田・石堂(北石堂)」が重なり合うようなところで、近世にはいずれとも呼び名が定まっていなかったことを示していると考えられます。この辺はいわゆる近世善光寺門前町のちょうど南の外れになる辺りですが<sup>\*4</sup>、長谷川派としてはあえて「善光寺」をつけて善光寺門前に工房を構えていることを強調しているようです。また、五代大内泰助からは名乗りも変わりますが、住居も桜枝町に移したようです。

さて敷板の墨書銘に戻ると、兼七が古仏の補彩を行い、光背と台座を新造したと書かれますが、同様の内容は別の作例でも見られます。市内芋井の池平公民館所蔵の薬師如来坐像は岩座の裏に墨書銘があり、「後光台座致ス/池平村/日光大士 新佛/薬師如来 古

※1 長谷川派仏師については、井原今朝男「信濃国広瀬荘域における仏像調査報告」(長野市誌編さん委員会編『市誌研究ながの』第6号、長野市、1999年。)及び、展覧会図録『村人の祈りと集いの場～お堂の役割を探る～』長野市立博物館、2000年。を参考にした。

※2 長谷川澄子「善光寺仏師 長谷川兼七との出会い」(『須高』第52号、須高郷土史研究会、2001年。)

※3 長谷川澄子氏によると、長谷川家は市内芋井の出身で、兼七が善光寺門前に居を構えたのは、現在の中央通り沿いで昭和通りより6～7軒下の旧清水宝石店のところということです。現在のしまんりよ小路入口にある栽松院の数軒下に当たります。

※4 小林計一郎『長野市史考』吉川弘文館、1969年。

佛 細色／月光大士新佛／寛政四壬二月吉日  
 ／善光寺新田町／大仏師長谷川／兼七作」と  
 いう内容です。兼七によって寛政4年(1792)  
 に書かれたもので、残念ながらこの時に新造  
 された日光・月光菩薩は伝わりませんが、古  
 仏に補彩し、光背と台座を新造したことが分  
 かります。



池平公民館蔵薬師如来坐像

また、敷板に  
 書かれる「三度  
 目」ということ  
 に関して他の作  
 例を見ていると、市内  
 七二会の倉並公民  
 館（薬師堂）所蔵  
 の薬師如来坐像に  
 関わると想定さ  
 れる板に類似の



池平公民館蔵薬師如来坐像  
 台座裏面（赤外線撮影）

事例を見ることが  
 できます（板は現  
 在単独のものとし  
 て保管されており、  
 本来の用途は不

明)。板には墨書銘  
 があり、「時文化五  
 初秋口也／御神形  
 此宮新夕到ス／善  
 光寺新田町／大仏  
 師長谷川兼七作」、  
 「時安政三辰丙月  
 初／同石堂町 三  
 代目 宦司政／大  
 仏師長谷川兼七



倉並公民館蔵薬師如来坐像

／謹而再色之」、  
 「時明治十五年／  
 五月吉日／四代目  
 再色之／長谷川専  
 司」、「五代目再  
 色之／長野市櫻枝  
 町 工人 大内泰助  
 ／明治三十七年七  
 月十四日」と書か  
 れます。「御神形」  
 に関わる4回分の  
 内容が、前の墨書  
 の隙間を埋めるよ  
 うにして板の4箇  
 所に記されます。



倉並公民館蔵墨書板

ここから、まず文  
 化5年(1808)に  
 兼七が「御神形」  
 を新造

し、同じ兼七が安政3年(1856)に、三代  
宦司とともに補彩を行ったことが分かります。  
この間48年です。倉並薬師堂は、弘化4年  
(1847)の善光寺地震で被災しているため<sup>※5</sup>、  
傷んだ御神形を補彩したということかもしれ  
ませんが、兼七が同じ仏像に二度関わったと  
いう事例です。それから26年後の明治15  
年(1882)に四代専司が補彩銘を、さらに  
22年後の明治37年(1904)に五代大内泰  
助が補彩銘を書き付けています。この事例で  
は、一体の仏像に対して兼七が二度、長谷川  
派仏師として見ると、四度関わっているとい  
うことが分かります。

以上これらの事例をまとめると、長谷川派  
仏師がどんな仕事をしていたかが浮かんでき  
ます。長谷川派仏師は善光寺門前に工房を構  
えながら、地域の仏像制作や修復を行って  
いました。修復の際には自らが新造した仏像の  
他、古仏も補彩し、仏像に合わせて光背や台  
座を新造することもありました。さらに一度  
関わった仏像には、同じ仏師、あるいは長谷  
川派仏師が代々何度も関わる場合がありまし  
た。今後は、長谷川派仏師による作例の更なる  
発掘とともに、各作例に長谷川派仏師がどの  
ように関わったのかを明らかにしていくことで、  
長谷川派仏師の仕事、さらに各仏師の個性など  
も見てくるのではないかと思います。

新収蔵の薬師如来坐像については、敷板の  
銘文が本像に関わるものであるかどうか確信  
が持てませんが、像自体が何度も修復されて  
いることから、銘文にあるように、兼七によ  
り「三度目」の補彩が行われたのかもしれま  
せん。前述したように、仏像自体は兼七の時  
代より古い作風が見られますので、兼七は古  
仏を修復したという関わり方になり、銘文と  
の整合性が取れます。

また光背・台座は江戸時代後期頃の作風で、  
兼七の時代とは合っていますが、光背の柄が  
台座上面の挿し込み穴の大きさ・形と一致し  
ないので、現状の光背・台座が一組のもの  
として兼七によって造られたということはでき  
ません。台座だけがこの時に兼七によって造  
られたもので、光背は像の膝前材が修復され、  
像が少し小さくなった後に造られたという可  
能性は残っています。その後長谷川派の別の  
仏師によって造られたものなのか、あるいは  
全く別の仏像から転用されたものという可  
能性もあります。

以上、本像には現段階では解明できない謎  
が含まれているものの、敷板に書かれる墨書  
銘は、近世の善光寺門前仏師の行状を伝える  
貴重な情報であり、また小田切川後集落と善  
光寺門前とのつながりを示唆する資料でもあ  
ります。

#### 《薬師如来坐像版木》

縦15.0cm、横  
12.2cm、厚さ2.1  
cm、木製版木。

薬壺を持つ薬  
師如来坐像が彫  
られ、蓮台の最  
下部に「信濃國  
川後薬師如来  
小田切村」とい



薬師如来坐像版木

う文字が彫られています。塗られた墨が黒々  
と残っていて、実際に使われたことが分か  
ります。版木の制作年代は不明ですが、小田  
切川後の薬師如来坐像が「川後薬師如来」と  
呼ばれ村外にまで信仰を広げていたことを示  
しています。

※5 『七二会村史』七二会村史編さん委員会、1971年。

### 《徳住筆 六字名号》

縦 32.0cm、横 10.8cm、紙本墨書。

「南無阿弥陀仏」の六字の下に「徳住（花押）」と書かれ、念仏行者徳本の弟子徳住（1777-1842）の筆になるものです。本作は師の徳本によく似た筆跡で書かれています。徳本たちは念仏を広めて全国



徳住筆六字名号

を廻国した念仏行者で、行く先々で庶民に日課念仏を授けるとともに、六字名号を書き与えています。徳住が徳本に入弟したのは文化13年（1816）、善光寺門前の西方寺だとされますので、この名号はそれ以降のものということになります。

### 《善光寺本尊御影》

縦 34.0cm、横 17.3cm、紙本版画。

善光寺の秘仏本尊を版画に表したもので、御影と呼ばれます。江戸時代以降の作例が多数残されていて、近世における善光寺信仰の広がりを物語っています。中央には左手に善光寺仏特有の刀印（人差し指と中指を伸ばす）を結ぶ阿弥陀如来が配され、向かって右に観音菩薩、左に勢至菩薩が表されます。観音・勢至も善光寺仏特有の梵篋印（胸前で両手を重ねる）



善光寺本尊御影

物語っています。中央には左手に善光寺仏特有の刀印（人差し指と中指を伸ばす）を結ぶ阿弥陀如来が配され、向かって右に観音菩薩、左に勢至菩薩が表されます。観音・勢至も善光寺仏特有の梵篋印（胸前で両手を重ねる）

を結んでいます。この三尊が一つの大きな光背に収まる一光三尊形式も善光寺仏の特徴で、光背には7体の小さな如来、七化仏が座っています。三尊の前には供養を捧げる男女の姿があり、善光寺縁起に登場するインドの長者、月蓋夫妻だとされています。

本図は前述の徳住筆六字名号と表具が同じであることが注目されます。水色と白色で表した花を菱形につなぐ花文を筆で描いた描表装です。善光寺仏は生きた阿弥陀如来として信仰され、融通念仏聖は善光寺信仰も伝搬したことが知られています\*6。本図が徳住によって六字名号と併せて同時にもたらされたものか、後に同じ表装がなされただけなのかは分かりませんが、川後集落では念仏とともに、善光寺信仰も行われていたということをおに伝えています。

なお、徳住筆六字名号と善光寺本尊御影は、それぞれ同じ体裁の木箱に納められており、2本がセットで扱われていたことの傍証になるかもしれません。蓋裏は二方棧作りで、蓋表は手彫りで整形されています。銘などはありません。

### 《百万遍数珠》

木製の数珠 856粒。

百万遍数珠とは、百万遍念仏を唱える際に数取りとして使用する大数珠。百万回念仏を唱えれば極楽往生するという信仰に基づき、複数人が車座になり、1,080粒（煩惱の数108に由来）の大数珠を繰りながら念仏を唱えま



百万遍数珠

\*6 宮島潤子『信濃の聖と木食行者』角川書房、1983年。

す。その際、融通念仏信仰では、自分の念仏が他人の功德に、他人の念仏が自分の功德に融通されると説かれ、大勢で念仏を唱えることが一人だけの念仏に比べて何倍もの功德になるのだとされます。10人の念仏講中であれば、1,080粒の大数珠を100回繰り回せば、10人分で約百万回の念仏を唱えたことになり、各人に百万遍の功德があるということになります。

本数珠は糸の端が切れていて輪になっておらず、切れ端から粒が散逸したらしく現状では856粒となっています。粒の大きさは不揃いですが、木の表面にはツヤがあり、講中の手で手繰られてきた時間を感じさせます。前述の徳住筆六字名号を掛けながら、百万遍念仏が行われた様子が想像されます。

### 《庚申本尊像》

縦57.5cm、横20.0cm、紙本版画淡彩。

庚申（かのえさる）の夜には、人が寝た後体内に住む三尸の虫が抜け出し、天帝に当人の悪業を告げに行くという道教の思想に基づき、庚申の夜は寝ずに過ごすという信仰があり、江戸時代以降全国各地に庚申講が結成され地区の行事



庚申本尊像

となっていました。庚申信仰が広まる過程で仏教と融合し、青面金剛が本尊として祀られました。

本図も、一面四臂（4本の腕）で体に髑髏や蛇を巻きつける憤怒の青面金剛が中央に配され、両脇に二童子、画面下部に四夜叉（鬼神）を伴っています。画面上部には日月、足元には三尸虫と解された三猿（不見・不聞・不言）が、足元両脇には朝を告げるつがいの鶏が置かれています。

本図が納められた木箱の蓋裏に墨書銘「明治十六年 仕入」とあり、明治16年（1883年）に購入されたことが分かります。

以上ご紹介してきたように、これらの仏像や掛軸は、集落の信仰を支えてきたものであるとともに、地域の歴史を物語る何物にも代えがたい文化財であり、本来であればそうした集落にとっての価値（意味）とともに現地において受け継がれることが理想的です。当館ではそうした地域の文化財を地域で守るためのサポートを第一に考えながら、市内の文化財を後世に伝えるための取り組みを継続していきたいと思えます。（竹下 多美）

【追記】 今回の資料受け入れに際して、ながはくパートナー（博物館ボランティア）「文化財保存グループ」のメンバーに資料のクリーニングを行っていただきました。



百万遍数珠のクリーニングの様子

## 博物館だより 第114号

発行日2020年6月30日

### 長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414  
TEL:026(284)9011  
<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum>

### 戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栃原3400  
TEL:026(252)2228

### 鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659  
TEL:026(256)3270

### 信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3  
TEL:026(262)3500

### ミュージ蔵

〒381-2405 長野市信州新町37-1  
TEL:026(262)2500